

衝動的・自制的に関する自己認知とその理由の検討

小橋 真理子*1・井田 政則*2

Study of the reason for recognition of being impulsive and self-controlling

KOBASHI Mariko and IDA Masanori

Abstract

We asked participants if impulsivity and self-control were comfortable or not, and good or bad. In addition, we asked them the reason as well. Almost 40 participants answered them - some participants did not answer completely. We analyzed these statements by KH Corder, and got some co-occurrence networks about them. As a result, the reasons for positive answers of impulsivity are “stressless” and “breaking away from daily life”, and negative answers of impulsivity are “expecting regret”, “failure”, “social expectations”, “personal relations” and “fatigue of personal relations”. Next, we also got some reasons for positive answers of self-control, which are “denial of impulsivity”, “social considerations” and “social relations”, on the other hand negative answers of self-control are “excessive” and “patience”. Human beings are required to be self-controlling for social adjustment in our process of growth, however, it is clarified that some people think impulsivity is not always negative but positive.

[Keywords] impulsivity, self-control, KH Corder

問 題

予定していなかったにもかかわらず、これを買いたいという衝動に駆られて買ってしまったことはあるだろうか。衝動的行動の一つである衝動買いをしたとき、人はどのように思うのだろうか。思いもよらずに良い買い物をしたと喜ぶのか、思い切って買ってスッキリしたと思うのか、またはこんなはずではなかった、失敗したと後悔するのだろうか。逆に、買いたいという衝動に駆られながらも自制して買わなかった人は、どのように思うのだろうか。衝動を抑えた自分を誇りに思うのだろうか、そんなことは至極当たり前のことと思うのだろうか、抑えることにストレスを感じてしまうのだろうか。衝動的に買い物をしたという行動は同じでも、その内的な反応はさまざまである。このように衝動によって行動を起こす、または起こさないことについて、いったい行為者はどのようなことを思うのだろうか。

小橋・井田（2016）は、衝動に関する自己認知を明らかにするために調査研究を行い、自分にとって衝動的なことは快か不快か、良いか悪いか、自制的なことは快か不快か、良いか悪いかについての回答を求めた。この自己認知調査票の質問内容は、「自分にとって衝動的・自制的なことは快か不快か」「自分にとって衝動的・自制的なことは良いと思うか悪いと思うのか」を問い、さらに「自分自身で自分のことを衝動的であると思うのか、自制的であると思うのか」「自分自身には衝動性が有ると思うのか無いと思うのか」を問うものであった。

その結果、衝動的が快であるとの回答者数と衝動的が不快であるとの回答者数に有意差はなかった。同様に、自制的が快であるとの回答者数と自制的が不快との回答者数にも有意な差はなかった。このことから衝動に駆られた時に、その衝動に従った場合でも、その衝動を自制した場合でも、それらを快と感じる人と不快と感じる人とがほぼ同程度いることが想定された。

* 1 立正大学大学院心理学研究科

* 2 立正大学心理学部教授

一方で、衝動的が良いとの回答者数に比べ衝動的が悪いとの回答者数は有意に多く、また自制的が良いとの回答者数に比べ自制的が悪いとの回答者数は有意に少なかった。すなわち衝動的が快と回答しながらも衝動的が悪いと回答した人、ならびに自制的が不快としながらも自制的は良いと回答した人がいることが示された。このことから、快・不快と感ずることと良い・悪いと思うことは必ずしも一致しないことが考えられた。

なお小橋・井田（2016）の研究は、衝動性に対する潜在的な衝動的-自制的態度の測定を目的とした潜在的連合テスト（Implicit Association Test, 以下 IAT；Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998）（小橋・井田, 2015）の実施時に同時に行った調査を基にしている。IAT は概念間の潜在的な連合を測定する手法であることから、概念は常に対になって用いられ、連合の対象となる概念も対で用いられる。この衝動的-自制的態度測定のための IAT では、「衝動的」「自制的」と「快」「不快」の2つの概念を用いた。この IAT では、「衝動的」を“理性や思慮により抑制されない行動傾向”とし、その反対の概念である「自制的」を“理性や思慮により抑制される行動傾向”と定義した。この IAT 実施時に提示された刺激語に関しては、「衝動的」が“即断・無計画・直感・手当たり次第・やみくも”であり、「自制的」が“熟慮・計画性・慎重・入念・じっくり”であった。これらの語は、破壊的・暴力的な語や我慢・忍耐などといった実験参加者の判断を過度に誘導するような否定的なイメージの語を避け、中立的な語群の中から予備調査によって決定したものである。このことから実験参加者の衝動的・自制的に対する自己認知判断は、中立的語群の呈示により統制されていた。また「快」「不快」に関する刺激語は、「快」が“良い・楽しい・すてきな・心地よい・魅力的な”であり、「不快」が“悪い・不愉快な・愚かな・いやな・退屈な”であった。これらの刺激語を使用し IAT を実施した結果、潜在的概念としては自制的が快であることが示された。この時同時に「衝動的」「自制的」に関する自己認知についての回答を求めたもののその理由については聞いていなかった。

小橋・井田は、再度衝動性に対する IAT の測定を実施した（小橋・井田, 2018）。ここでは衝動性に対する潜在的自己概念と潜在的感情について検討しており、潜在的自己概念では「衝動的」「自制的」と「自己」「他者」との連合を、潜在的感情では「衝動的」「自制的」と「快」「不快」との連合を測定した。なお「衝動的」「自制的」「快」「不快」の刺激語は小橋・井田（2016）と同じ語を使用した。加えて「自己」では“わたくし・我々・私・自身・自分”、「他者」では“ともだち・他人・知り合い・知人・友人”の刺激語を使用した。その結果、潜在的自己概念では自制的傾向にあり、潜在的感情では自制的を「快」と感じていることが示され、その両者は関連することが示された。

前述の小橋・井田（2016）では、衝動的が「快」であるとの回答者数と衝動的が「不快」であるとの回答者数、および自制的が「快」であるとの回答者数と自制的が「不快」との回答者数に有意差はなかったが、小橋・井田（2018）の IAT の結果では潜在的自己概念は自制的傾向にあり、潜在的感情は自制的を「快」と感じる傾向にあった。これらのことから、IAT による潜在指標と顕在的な自己認知は必ずしも一致しないことが推測される。

小橋・井田（2018）の IAT 実施時では、小橋・井田（2016）と同様に衝動に関する自己認知調査を実施し、さらにその理由についての自由記述を求めている。そこで本研究では、この自由記述の分析を行うことにより、どのような感情や考え方が衝動的・自制的に対して「快・不快」そして「良い・悪い」という判断にいたったかを明らかにすることを目的とした。

方 法

調査協力者

都内私立大学に在籍する学部生および大学院生43名（男性13名・女性30名）であった。

平均年齢は、21.49歳（ $SD=1.74$ ）であった。

調査手続き

大学の授業にて調査協力者をつのり、その後個別に調査を実施した。質問用紙は無記名自己記入式であった。なお、調査用紙への回答前に研究の趣旨を説明し、調査への参加は自由であること、個人のプライバシーは保護されることを口頭およびフェイスシートにて教示した。

調査期間

2016年2月～7月であった。

自己認知調査票

自己認知調査票では、「衝動的なこと―自制的なこと」についてどう認知しているのか「快」または「不快」・「良い」または「悪い」の二者択一で回答してもらい、それぞれの理由について自由記述を求めた。具体的な質問内容は、次の通りであった。

- 1) あなたにとって衝動的なことは「快」または「不快」どちらですか (快・不快)「理由」
- 2) あなたにとって自制的なことは「快」または「不快」どちらですか (快・不快)「理由」
- 3) あなたにとって衝動的なことは「良い」または「悪い」どちらですか (良い・悪い)「理由」
- 4) あなたにとって自制的なことは「良い」または「悪い」どちらですか (良い・悪い)「理由」

分析手続き

回答のうち理由についての記述内容を KHCoder (樋口, 2014) を用いてテキスト分析を行った。その際、衝動的に関する記述 (衝動的「快・不快」および「良い・悪い」) を一つのテキストにまとめ、自制的に関する記述 (自制的「快・不快」および「良い・悪い」) を別のテキストにまとめたうえで、それぞれのテキストについて分析を行った。なお、分析にはソフトウェア: KHCoder 2 を用いた。

なお、分析の前に回答文章の誤表記および表記のゆれを訂正したうえで、類似の表現は統一した表記になるよう修正した (例: 「自ら」は「自分」、「スムーズ」は「円滑」、「考えることのない」は「考えない」、「悩むことなく」は「悩まない」など)。また調査票では、各質問に対する回答の理由を聞いているため、「…なので」や「…だから」で止めて完結していない文章が多く見られた。そこで明確に分析できるように、各質問に合わせて述語を付加して文章を修正したうえで、これを分析に使用した。

結果

1. 自己認知調査票回答数

調査協力者43名の衝動的「快・不快」「良い・悪い」、自制的「快・不快」「良い・悪い」に関する回答者数を以下に示した。なお、その回答者のうち理由の自由記述において無記入および問題の意図の取り違いによる無効回答者数を () 内に示した。

衝動的「快」18名 (無効回答2名)、「不快」25名 (無効回答1名)、「良い」11名 (無効回答2名)、「悪い」32名 (無効回答0名) であった。

自制的「快」23名 (無効回答1名)、「不快」20名 (無効回答1名)、「良い」42名 (無効回答5名)、「悪い」1名 (無効回答0名) であった。

2. 衝動的「快・不快」と衝動的「良い・悪い」の理由に関する分析結果

43名いる調査協力者のうち、分析の対象となったのは、衝動的が快16名、不快24名、衝動的が良い9名、悪い32名であった。

分析するための前処理として、語が分断されて検出されると意味がとれなくなるものに関しては強制抽出する語に指定した (衝動的快・衝動的不快・衝動的良い・衝動的悪い・考えない・悩まない・悪い結果・後で・計画性・可能性・普段できない・疲れない)。また、単独で検出すると意味をなさない語は使用しない語として指定した (動く・多い)。

分析の結果、総抽出語数は1074 (使用数494)、異なり語数は224 (使用数170) であった。Table 1 に頻出150語のうち、2回以上使用された語を記載した。

さらに、抽出された語について共起ネットワークを用いて分析を行った。まず「快」「不快」「良い」「悪い」と抽出語との共起関係を検討するために、語と見出しのネットワークを図示した (Fig.1)。その際、共起関係が確認しやすいようにすべての語を小さめの円で、最小スパニング・ツリーだけを描画するよう設定した。

「快」に共起した語は〔気持ち・悩まない・感じ・直感・考えない・衝動的快・楽しい〕であった。なお〔自分〕は、「快」と「悪い」とに共起した。「不快」に共起した語は〔人・新しい・従う・良い・衝動的良い・悪い・感情・普段できない・瞬時・後で・いや・衝動的不快・思う・突然〕であった。なお〔失敗〕は、「不快」と「悪い」とに共起した。「良い」に共起した語は〔人・新しい・従う・良い・衝動的良い・悪い・感情・普段できない〕であった。なお〔行動〕

Table 1 衝動的快・不快、衝動的良い・悪いに関する頻出後（2回以上使用された語）

順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度
1	衝動的悪い	31	16	経験	4	31	高い	2
2	衝動的不快	24	17	直感	4	32	社会	2
3	衝動	22	18	迷惑	4	33	周囲	2
4	行動	18	19	いや	3	34	従う	2
5	衝動的快	16	20	リスク	3	35	瞬時	2
6	自分	12	21	可能性	3	36	状況	2
7	失敗	12	22	計画性	3	37	新しい	2
8	後悔	11	23	他人	3	38	人	2
9	衝動的良い	10	24	突然	3	39	悩まない	2
10	後で	8	25	良い	3	40	判断	2
11	考えない	8	26	楽しい	2	41	疲れる	2
12	思う	8	27	感じ	2	42	不快	2
13	悪い結果	7	28	感情	2	43	普段できない	2
14	悪い	5	29	期待	2			
15	コントロール	4	30	気持ち	2			

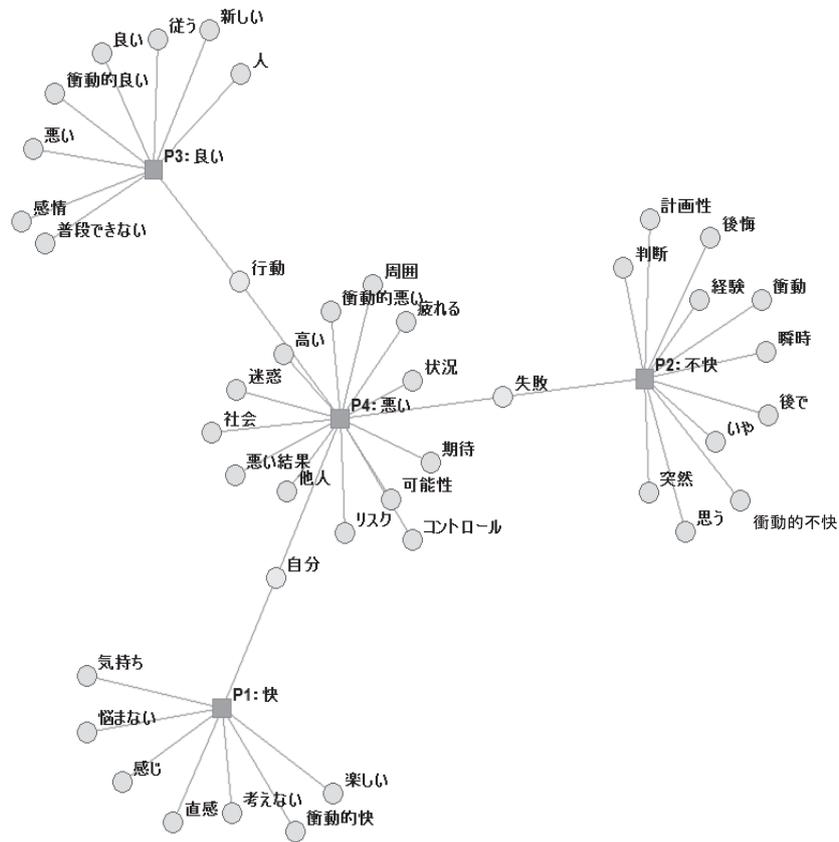


Fig.1 衝動的に関する語と見出しの共起ネットワーク

は、「良い」と「悪い」とに共起した。「悪い」に共起した語は〔状況・疲れる・周囲・衝動的悪い・高い・迷惑・社会・悪い結果・他人・リスク・コントロール・可能性・期待〕であった。

つぎに、抽出したそれぞれの語同士のネットワークを検討するために、語と語の共起関係を図示した (Fig.2)。その際、各語の共起関係が確認しやすいように、強い共起関係ほど強い線で、すべての語を小さめの円で描画した。

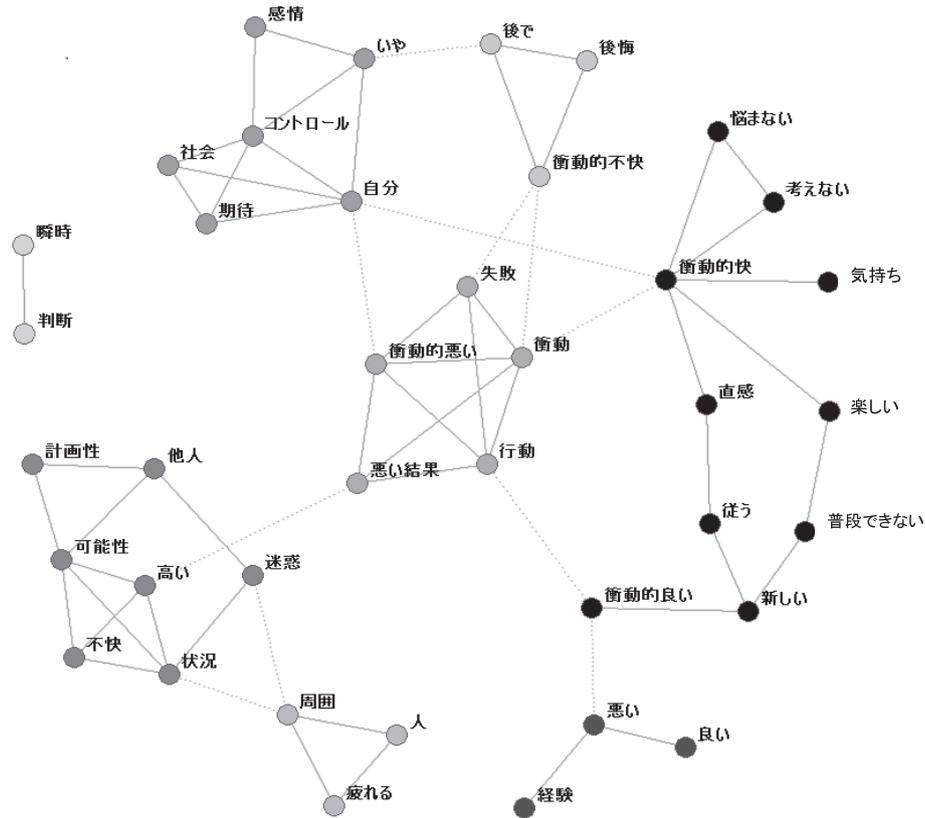


Fig.2 衝動的に関する語と語の共起ネットワーク

その結果、〔衝動的快・悩まない・考えない・気持ち・楽しい・普段できない・直感・従う・新しい・衝動的良い〕が共起した。これら共起した語群を「衝動的ポジティブ」群とした。次に〔衝動的不快・後で・後悔〕が共起したことから、これらの語群を「後悔予期」群とした。さらに〔いや・感情・コントロール・社会・期待・自分〕が共起したことから、これらの語群を「社会的期待」群とし、〔衝動的悪い・失敗・悪い結果・衝動・行動〕が共起したことから、これらの語群を「失敗」群とした。また、〔迷惑・状況・不快・可能性・高い・他人・計画性〕が共起したことから、これらの語群を「対人関係」群とし、〔周囲・人・疲れる〕が共起したことから、これらの語群を「対人疲労」群とした。これら「後悔予期」群・「社会的期待」群・「失敗」群・「対人関係」群・「対人疲労」群は、それぞれ衝動的ネガティブな意味を持っていた。なお、〔瞬時・判断〕は「即時反応」群とした。

3. 自制的「快・不快」と自制的「良い・悪い」の理由に関する分析結果

43名いる調査協力者のうち、分析の対象となったのは、自制的が快22名、不快19名、自制的が良い37名、悪い1名であった。

前処理として、衝動的「快・不快」「良い・悪い」と同様に、強制抽出する語を指定し（自制的快・自制的不快・自制的良い・自制的悪い・自制的すぎ・考える）、使用しない語を指定した（多い・少ない）。

分析の結果、総抽出語数は1121（使用数543）、異なり語数は246（使用数187）であった。Table 2に頻出150語のうち、2回以上使用された語を記載した。

さらに、抽出された語について、共起ネットワークを用いて分析を行った。まず「快」「不快」「良い」「悪い」と抽出語との共起関係を検討するために、語と見出しのネットワークを図示した (Fig.3)。その際、共起関係が確認しやすいようにすべての語を小さめの円で、かつ最小スパニング・ツリーだけを描画するよう設定した。

Table 2 自制的快・不快、自制的良い・悪いに関する頻出語（2回以上使用された語）

順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度
1	自制的良い	35	17	悪い	4	33	感情	2
2	考える	23	18	結果	4	34	窮屈	2
3	自制的快	22	19	後悔	4	35	苦手	2
4	自制的不快	19	20	失敗	4	36	決める	2
5	自制	18	21	判断	4	37	思える	2
6	自分	17	22	いろいろ	3	38	事態	2
7	思う	13	23	コミュニケーション	3	39	社会	2
8	行動	11	24	リスク	3	40	重要	2
9	良い	10	25	円滑	3	41	衝動	2
10	コントロール	6	26	関係	3	42	慎重	2
11	他者	6	27	周囲	3	43	生きる	2
12	物事	6	28	状況	3	44	対処	2
13	抑える	6	29	迷惑	3	45	大切	2
14	我慢	5	30	律する	3	46	悩む	2
15	好き	5	31	意識	2			
16	自制的すぎ	5	32	可能	2			

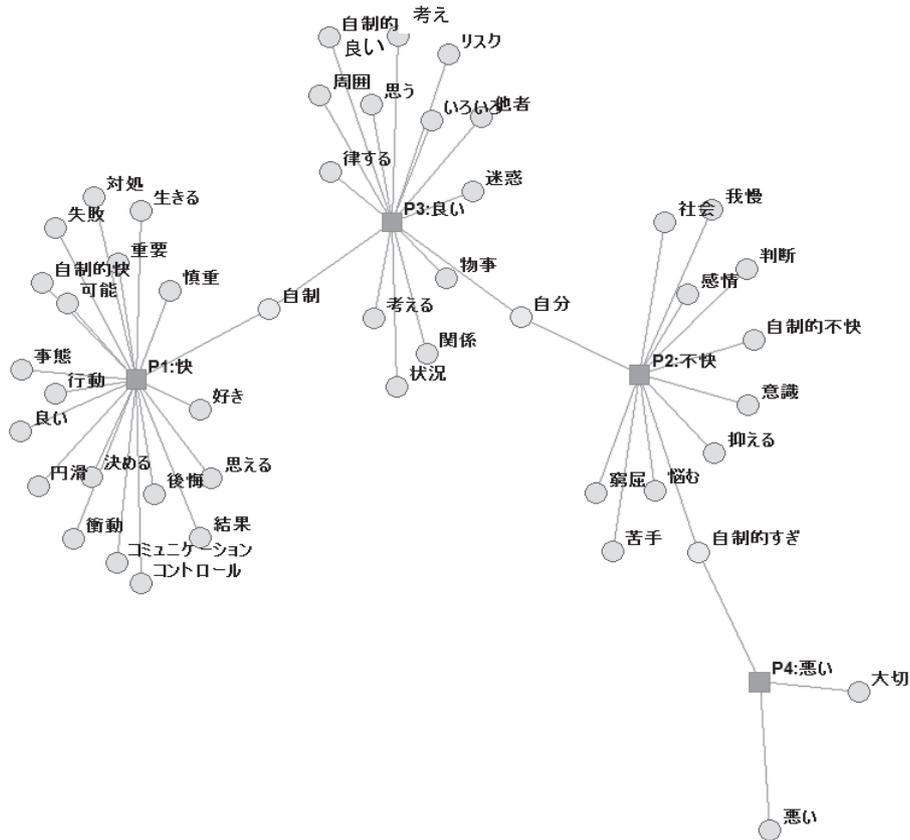


Fig.3 自制的に関する語と見出しの共起ネットワーク

その結果、「快」に共起した語は〔慎重・生きる・重要・対処・失敗・自制的快・可能・事態・行動・良い・円滑・決める・衝動・コミュニケーション・コントロール・後悔・結果・思える・好き〕であった。なお〔自制〕は、「快」と「良い」とに共起した。「不快」に共起した語は〔社会・我慢・感情・判断・自制的不快・意識・抑える・悩む・苦手・窮屈〕であった。なお〔自分〕は、「不快」と「良い」とに共起し、〔自制的すぎ〕は、「不快」と「悪い」とに共起した。「良い」に共起した語は〔迷惑・他者・いろいろ・リスク・考える・思う・自制的良い・周囲・律する・考える・状況・関係・物事〕であった。「悪い」に共起した語は〔大切・悪い〕であった。

つぎに、抽出したそれぞれの語同士のネットワークを検討するために、語と語の共起関係を図示した (Fig.4)。その際、ネットワークの強度よりも各語の共起関係が確認しやすいようにすべての語を小さめの円で描画した。

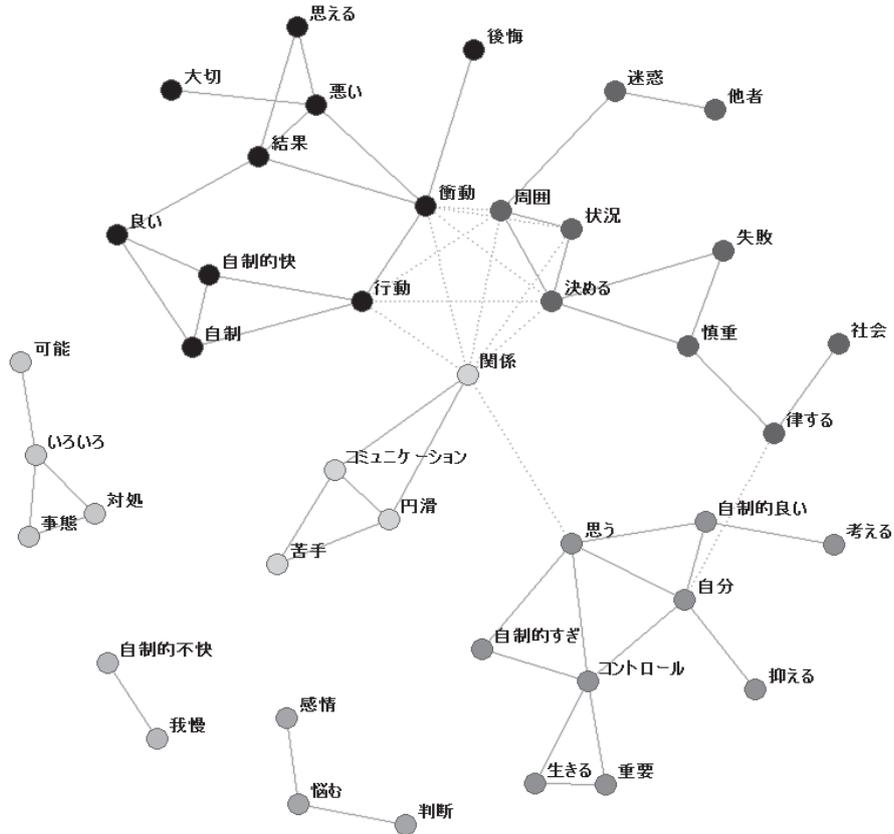


Fig.4 自制的に関する語と語の共起ネットワーク

その結果、〔自制・良い・自制的快・行動・結果・悪い・思い・大切〕が共起したことから、これらの語群を「自制肯定」群とした。次に〔他者・迷惑・周囲・状況・決める・失敗・慎重・律する・社会〕が共起したことから、これらの語群を「社会的配慮」群とした。さらに〔関係・コミュニケーション・円滑・苦手〕が共起したことから、これらの語群を「対人関係」群とした。また〔考える・自制的良い・自分・思う・抑える・コントロール・自制的すぎ・生きる・重要〕が共起したことから、これらの語群を「自制的両面価値」群とした。他に〔可能・いろいろ・対処・事態〕が共起したことから、これらの語群を「対応多様性」群とした。〔自制的不快・我慢〕は「自制過剰」群、〔判断・悩む・感情〕は「熟慮」群とした。

考 察

衝動的および自制的に関する自己認知の理由を分析した結果、語と見出しのネットワークの分析では、衝動的と自制的について「快」「不快」「良い」「悪い」のおのおのを見出しとして共起した語群を得た。さらに、共起ネットワークの分析では、衝動的および自制的のそれぞれについて、いくつかの意味ある共起した語群を得た。

第一に、衝動的に対する語と見出しの共起ネットワークにおける分析結果を考察する。まず衝動に対するポジティブな側面に着目すると、「快」では〔考えない・悩まない・楽しい〕などの語が共起し、ストレスな状態をもたらすことで快と感じていることが示された。なお、「快」と「悪い」との両方に共起していた〔自分〕という語は、文中で「自分らしく・自分の好きなように」などと使われていた一方で、「自分をコントロールできない・自分が苦しむ」などと使われていたため共通したと考えられる。このことから、個人にとって『自分』という主体が、自分らしくありたいのか、自分をコントロールしたいのかが、衝動的「快」と衝動的「悪い」との分岐点の一つではないかと思われる。「良い」では、〔新しい・普段できない〕などの語が共起し、衝動が日常からの脱却につながっていることが伺えた。なお、「良い・悪い」との反する語が共起しているが、文中では、「良いこともある・悪いかどうか考えない」などの記述であっ

たため、これが反映したと考えられる。

次に、衝動に対するネガティブな側面に着目する。「不快」では、〔後で・後悔・計画性・突然・いや・衝動〕などの語が共起し、後悔予期や計画性がなく突然起きることを不快と感じていることが示唆された。ここに含まれている〔いや〕は、「自分がいやになる・いやな思いをする」などの記述であり、そのことが不快につながったと考えられる。つぎに「悪い」では、〔周囲・迷惑・社会・他人〕などの語が共起し、対人関係や社会的配慮から衝動が悪いと思っているのではないかと思われる。また、〔失敗〕という語は「不快」と「悪い」との両方に共起していた。「不快」では、「失敗するから・失敗の経験があるから」などと使われており、「悪い」では、「失敗のおそれがあるから・失敗が多いから」などと使われていた。これらのことから、失敗経験と失敗予期に対する感じ方が異なることが示唆された。

なお〔行動〕という語が衝動的「悪い」と「良い」の両方に共起していた。「悪い」では、「行動が悪い結果につながる」との記述であり、衝動的行動の結果に着目しているが、一方「良い」では、「行動しないより行動した方がよい・衝動にかられて行動するなら大事な事だ」との記述であり、衝動的に行動することを是認していることが伺えた。

以上のことから衝動に対するポジティブなイメージは、“衝動的に行動することによりストレスで自分らしくいられ、日常からの脱却につながる”ことにあり、また衝動に対するネガティブなイメージは、“無計画な突然の行動の結果が失敗につながり、周囲に迷惑をかけ、後悔やいやな思いをする”ことにあることが推測された。

第二に衝動的に関する語と語の共起の分析結果を考察する。ここでは、複数の語が共起した語群として捉えることができ、「衝動的ポジティブ」群では〔衝動的快〕と〔衝動的良い〕はともに共起しており、分ちがたいものと推測される。このことから衝動的であることは、悩まない・考えない・直観に従うことで楽しく、普段できないことができることから、衝動的は快であり、かつ良いというポジティブなイメージがあり、衝動が日常から一步踏み出す原動力として望まれているのではないかということが伺える。

一方で衝動的をネガティブに捉えるものは「後悔予期」群・「社会的期待」群・「失敗」群・「対人関係」群・「対人疲労」群と複数の共起関係が見られ、さまざまな角度から否定的に捉えていることが示された。中でも、後悔するから衝動的は不快だという後悔予期が衝動的不快の主な要因であることが推測される。しかし〔後悔〕から「社会的期待」群の〔いや〕（「自分がいやになる、いやな思いをする」など）へと共起していることから、社会の期待に沿うために後悔したくないと思っていることが伺えた。さらに、「対人関係」群では、他人に迷惑がかかる可能性があるという社会的配慮が伺え、このことから衝動に対するネガティブなイメージには、後悔への否定と社会との関係が重要な要因として潜んでいるのではないかと思われる。

第三に、自制的に対する語と見出しの共起ネットワークにおける分析結果を考察する。まず自制的についてのポジティブな側面に着目すると、「快」では、〔慎重・生きる・円滑・コミュニケーション〕などの語が共起しており、「良い」では他者の迷惑を思うことや、状況やリスクを考えることが共起していた。社会で快適に生きるために自制的は快であり、社会に適応するためには自制的は良いと思っていることが伺えた。なお、自制が「快」と「良い」の両方に共起していたが、文中では「自制することで落ち着いて考えることができるので快、自制することそのものが良い」などの表現の違いとなっていた。自制することが行動様式となっている場合と、考えることなく「良い」と思っていることの相違であると思われる。

次に、自制に対するネガティブな側面に注目する。「不快」では、〔社会・我慢・抑える・苦手・窮屈〕などの語が共起しており、本来の自分にとって望まない自制であることが伺えた。また、〔自分〕が「良い」と「不快」に共起していたが、自分をコントロールできることはすごいと誇れることで「良い」であり、その一方で自分本来の欲求を押えるので「不快」という記述となったのではないだろうか。さらに、〔自制的すぎ〕は、「不快」「悪い」との双方に共起しており、過度な自制は受け入れがたいものであることが示唆される。「悪い」では、自制が大切であると認識しつつ、自制的過ぎるのはよくないとし「悪い」とネガティブに捉えていた。自制することは、社会で快適に適応していくうえで必要である一方、自制し過ぎることでネガティブな印象を持つてしまうのではないだろうか。

第四に、自制的に関する語と語の共起における分析結果を考察する。自制的をポジティブに捉えるものとして、「自制肯定」群では自制すること自体が快であり良いとしており、「社会的配慮」群・「対人関係」群では、自制することの効果期待していることが伺えた。また「自制的両面価値」群は、自制に対して生きるうえで重要だが自分を抑えることでもあるという複雑な心境であり、それでも「対応多様性」群は、自制することで考えることができ様々な事態に対処

できると捉えていることが特徴的であろう。一方で「自制過剰」群では、我慢することへの不快さが伺えた。すなわち自制することは、そのまま肯定されるものであり、社会的・対人的にも重要であるが、自分を抑えることにもつながりかねず、過剰に我慢することは不快だと思っていることが推測された。

以上のことから、本研究における“自制することが快であり良い”というように「自制的」が行動様式でありそのままに肯定するものと思っているという結果に関しては、潜在的に「自制的」が「快」および「良い」という結果（小橋・井田, 2018）と一致していると考えられる。しかし「衝動的」に対して“ストレスフルであり日常からの脱却”としてポジティブに捉え、「自制的」に対して“過剰な我慢につながる”とネガティブに捉えているという結果に関しては、潜在指標との相違があると推測された。その相違には、衝動に対するストレス緩和への期待、自制に対する社会的配慮や対人関係についての複雑な思いがからんでいるのではないかと考えられる。

本研究では、回答者数も少なく収集できた語数も多くはない。しかしながら、衝動的・自制的に対するさまざまな思考や思いを抽出することができたと考えられる。

Evenden (1999) は、衝動性には日々の変わりない生活に彩りを加える側面があると述べており、本研究において、衝動的であることが、新しいことに踏み出すきっかけであり、本来の自分であるというポジティブな語群が抽出できたことは、衝動に対するイメージの塗り替えに多少なりとも貢献できたのではないかと思われる。

引用文献

- Evenden, J. L. (1999). Varieties of impulsivity. *Psychopharmacology*, **146**, 348-361.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: the implicit association test. *Journal of personality and social psychology*, **74**, 1464-1480.
- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版.
- 小橋真理子・井田政則 (2015). IAT を用いた潜在的な衝動的－自制的態度の測定 日本心理学会第79回大会発表論文集, 30.
- 小橋真理子・井田政則 (2016). 衝動性に関する自己認知と衝動的個人特性との関係 立正大学心理学研究年報, **7**, 55-63.
- 小橋真理子・井田政則 (2018). 衝動性に対する潜在的自己概念と潜在的感情の検討 日本心理学会第82回大会発表論文集, 702.